

2017年4月30日川越教会

神の福音

加藤 享

[聖書] ローマの信徒への手紙3章20～24節

なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。

[序]死に対する鈍感さ

或る人がこのように言っていました。「年が進み、死が次第に身近に迫ってきて、死ぬことを考えざるを得なくなった。ごまかさないで自分の人生を見なければならなくなった。人間の醜さや人と共に生きるが故の争いを深く思うにつけ、信仰なしには生きられなくなった。ところが信仰を持たないで平気で生きている人が何と多いことか。不思議だ」。

私の場合は来週で85才、死が間近になりその備えをしなければと思いつつも、未だ川越教会牧師という大事な務めをさせていただいているので、その任務の遂行に集中する毎日を送っています。そして自分の老化を、呆れたり嘆いたりしつつ、それでも働ける感謝の日々を送っています。しかし来年の3月で引退したら、さてどのような心境になるのでしょうか。

その人が、続けてこう言っています。「死に対する鈍感さ、それは自分の罪深さに対する鈍感さから生まれる」。でも罪に対して敏感になれば平安を失うので、私たちの心が自分の平安を守るために、努めて避けようとしているからでしょう。そこで罪の赦しをどのように得るか、自分の罪を逃がずに赦しを求めつつ誠実に人生を全うする信仰が、死の備えに不可欠なのではないでしょうか。

私たちは先週から6月末まで、聖書教育のカリキュラムに従って、ローマの信徒への手紙を読み始めました。パウロが語る福音を学びつつ信仰を養い、誠実な人生を送って行きたいものです。

[1]最も大切なこと

世界宣教に当たっていた使徒パウロは、ローマ帝国の都ローマにも是非行きたいと願っていました。しかしなかなか行けないので、先ず手紙を書き送ることにしました。「わたしは、ギリシア人にも未開の人にも、知恵のある人にもない人にも、果たすべき責任があります。それで、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を告げ知らせたいのです」(1:14-15)。

ローマの都に誕生した小さな諸教会にもぜひ告げ知らせたい福音とは？ ローマ教会への手紙

より以前に、**コリントの教会**に書き送った手紙で、パウロはこう語っています。「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、**キリスト**が、聖書に書いてあるとおり、わたしたちの罪のために**死んだこと**、**葬られたこと**、また、聖書に書いてあるとおり、三日目に**復活したこと**、ケファ(ペトロ)に現れ、その後十二人に**現れたこと**です。」「そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。わたしは、神の教会を**迫害した**のですから、使徒たちの中でも**いちばん小さな者**であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。」(15:3～9)

主**イエス・キリスト**は貧しい者、弱い者、病気で苦しむ者を優しく助けました。大勢の人々をわずかなパンで満腹させたり、更に死んでしまった者を生き返らせる奇跡すら、子ども、若者、大人と、三度もなさいました。そこで、この方こそ**待望のメシア**(救い主)だと大勢の人々が期待するようになりました。しかしユダヤ教社会を混乱させる**破壊者**だとして、大祭司以下の指導者たちによって逮捕され、理不尽にも**十字架**にはりつけにされてしまいました。

どんなに優れた働きをしても、死んでしまつては**万事休す**です。弟子たちは皆身を隠してしまいました。ところが主イエスは、三日目に墓から**復活**して弟子たちの前に再び現れて、**彼らの信仰**を復活させたのです。弟子たちは、天に帰って行かれたキリストに代わって神より送られた**聖霊**を受けるや、見違えるような伝道者となり、**キリストの福音**を力強く宣教し始めました。更に、クリスチャン迫害の急先鋒だった**パウロ**までもが、復活されたキリストとの出会いによって、劇的な**回心**を体験したのでした。

[2]神の義とは

パウロは、挨拶と自分の願いを述べますと、早速**本論**に入りました。「わたしは**福音**を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに**救い**をもたらす**神の力**だからです。福音には、**神の義**が啓示されていますが、それは初めから終わりまで**信仰**を通して**実現**されるものです。正しい者は、信仰によって生きると書いてあるとおりです」(1:16～17)。

では福音に啓示されている**神の義**とは何でしょうか？「**義**」とは、漢和辞典には、正しい**道理**、正義・信義という**道徳**、公共のための正しい**基準**と記されています。しかし聖書では、「**神の前に正しいこと**」を言います。神は**正しく**、**義なる神**ですから、その神の定めに従って歩み、**神の掟**を**忠実に**生きることが、神に**良い**とされる人です。しかし人間は果たして**神の前に正しく**生き抜くことができるのでしょうか。

旧約聖書に登場する**モーセ**は、**イスラエル民族**をエジプトの奴隷状態から導き出し、神の示しに従って**律法**を制定した**大指導者**です。しかし彼はエジプトからカナンへの民族大移動の途中で飲み水が欠乏した時、「**岩に命じて**」と神から言われたのに、杖で**岩**を打ち叩いて水を得ました。岩に向かってただ言葉をかけるだけよりも、神から与えられた杖で岩を打ち叩いて砕く方が確かだと思ったのです。しかしその**不従順の罪**のため、彼は目的地に入ることを許されず、カナンの手前で死にました。何という**神の厳しさ**でしょうか。

このようにどんなに**信仰深い偉人**でも、神の御心に忠実に従い通して、**罪を犯さない 生涯を送る**ことは出来ないのです。そこでパウロは3章9節以下に、旧約聖書に記されている「**正しい者はいない。一人もいない**」という言葉を一列記して、「**律法を実行することによって、だれ一人神の前で義とされない。律法によっては罪の自覚しか生じないのです**」と述べました。

そしてパウロは、この現実立って、「**イエス・キリストを信じる**ことにより、信じる者すべてに与えられる**神の義**」を説明し始めます。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただ**キリスト・イエスによる贖いの業**を通して、**神の恵み**により無償で**義とされる**のです。」と述べました。これは1章17節の「福音には、**神の義**が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで**信仰を通して実現される**のです。正しい者は**信仰によって生きる**と書いてあるとおりです」を受けた言葉です。

中世のカトリック教会の世界に**宗教改革**をもたらした**マルチン・ルター**は、**神の義**しさを身に着けようと必死に修道院生活を送っていました。彼にとって神の義しさは、耐えられないほど厳しい**さばきの義**しさでした。ですから神の義という言葉が**嫌いだった**とさえ言っています。

ところがまさに**霊の働き**に導かれて、彼は神の義について自分が全く**誤解**していたことに気がきます。義は、我々が懸命に**獲得する義**ではなく、**恵みとして神がお与えになる義**、私たちに**受け身の義**だ、と示されたのです。彼はこう書いています。「**神の義**をこれまで私は深く憎んできた。それだけに今は、いよいよ愛すべく、甘いものとなった。ロマ書1章17節はわたしにとって**天国への門**になった」。

[3]神に見捨てられる死

旧約聖書では、**律法を行うこと**によって神に**義とされる信仰**が信じられていました。しかしそれは別の原理、即ち**イエス・キリストを信じる**ことによって、神の義が**与えられる**ことになったのです。しかしこの救い主キリストは、**律法と預言者**、即ち旧約聖書で預言されてきた**メシア**(キリスト)です。そこで旧約聖書とは別の原理だが、旧約聖書で立証されてきた**メシアの十字架の死**という**贖いの業**を通して、信じる者全てに無償で神の義が与えられることになったと、パウロは述べたのです。

そこで、律法によらずに、**罪の赦しと救い**をもたらして下さった**主イエス・キリストの十字架の死**を、もう一度見つめ直してみることにいたしましょう。

主イエスは12人の若者を選び、生活を共にして特別教育をされました。彼らはやがて「**あなたはメシア、生ける神の子です**」と告白できる**信仰者**になりました。すると主はご自分が「**必ずエルサレム**に行き、長老、祭司長、学者から多くの苦しみを受けて**殺され**、三日目に**復活**することになっている」と予告し始めました。ペトロが驚いて「**とんでもないことです。そんなことがあってはなりません**」と答えると、「**サタン、引き下がれ。わたしの邪魔をする者だ**」と叱っています。そしてこの予告を繰り返

返し語られました。

そしてお言葉通りに、ユダヤ人最大の**過越しの祭**にエルサレムに上り、大祭司たちに逮捕されて、十字架に架けられてしまいます。その直前の弟子たちとの**最後の晩餐**の終わりに、主はパンを裂き、「取って食べなさい。これはわたしの体である」また杯を差し出して、「これは罪がゆるされるように多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である」と言われて、パンとぶどう酒の杯を、弟子たち一人一人に与えました。

しかし食事を終えると、ゲッセマネの園に行き、弟子たちに「私は死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、私と共に目を覚ましていなさい」とおっしゃり、うつ伏せになって祈り始めました。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」。

しかし裏切り者ユダの手引きで逮捕され、その夜のうちに大祭司の屋敷で死刑の判決を受け、夜が明けると総督ピラトに引き渡され、十字架刑の執行となりました。十字架刑とは、断末魔の苦しみを出来る限り引きのばして殺す刑罰で、最も重い罪を犯した者に与えます。主イエスは午前9時に磔にされ、午後3時に「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と大声で叫び、息を引き取られました。

最後の晩餐の終わりに、「私の体、私の流す血」といってパンと杯を弟子たちに与えた主が、その後でゲッセマネの園に行き、どうして、**悲しみもだえて**祈られたのでしょうか。また何故、十字架上で「どうしてわたしをお見捨てになったのですか」と叫んで、息を引き取られたのでしょうか。

私はこのように受け取ります。それは、最後の晩餐の時に至っても、12人の**弟子たち**の間に暗黙の**出世争い**がつのり、**裏切り者**まで生まれる有様だったからです。また主イエスの評判が増し加わるにつれて、**ユダヤ教指導者**たちの**妬み、憎しみ、殺意**が、遂に逮捕・十字架刑にまで発展してきたからです。このように、**内に外**に増し加わっていく**人間の罪**のおぞましさ、凝縮された**一切の罪の重さ**に、「果たして自分独りで担い切れるだろうか」という**恐れ**が、神の御子である主イエスにも**深刻**になってきたからではないでしょうか。

ルターは「キリストほど**死を恐れた人**はいない。それは死を、**神から見捨てられること**だと強く自覚して居られたからだ」と言っています。本当にそうですね。罪を全く犯すことがなく、義なる神と一体であるキリストだからこそ、神に見捨てられる罪、その**罪の結果としての裁きの死**を深く恐れて、あのように地にひれ伏して祈り、十字架の上でも**死の苦しみを**味わいつくし、**神に見捨てられる罪人**になり切って、死んでいかれたのですね。

[結]神の応答・復活

主は**墓**に葬られました。しかし三日目の朝に、神はその墓から主を**復活**させました。神に見捨て

られる罪人になり切って、裁きの死を受けられた主イエスを、神は墓から復活させて、罪を赦されて、**新しい命に生きる恵み**を与えられる**神の救い**を、現して下さいました。「わが神、わが神」と叫んで問いかけた**主イエスの祈り**に、**神が答えて下さった**のです。

私は今回も、主イエスの最後の一週間を繰り返し読みました。そして、**自分の罪深さに鈍感**ではないのかと、強く反省させられました。「**至らない自分の未熟さを反省する**」という程度で片づけてきたのです。申し訳ないことです。自分の罪深さに、もっと**真剣**にならなければならないのです。

しかし主イエスは、**私の罪の一切**をも引き受けて、あのように苦しみ、神から見捨てられる裁きの死を、**私のためにも**、受けて下さったのです。そして神は、その主イエスを**墓より復活**させるという恵みをもって、**主の叫びに答えて下さいました**。そして私の罪をも赦し、**義とされて新しい命に生きる恵み**を、**私にも**与えて下さったのです。

私たちの人生は、**滅びの死**で終わるのではなくなりました。墓が**終着駅**ではなくなったのです。一切の罪を赦され、神の前に義とされて、**天国に迎えられる新しい命**に生きる恵みは、イエス・キリストを**私の救い主**と信じることによって、どんな者でも無償でいただけるのです。自分の罪深さを自覚しつつ、**十字架のキリストを救い主と信じ**、天国に生きる恵みを求めて、地上の生涯を全うして参りましょう。

祈ります:神さま、私たちは自分なるべく苦しまないで生きようとしがちです。でも私が犯した罪で、どれだけ人を傷つけてきたことでしょうか。私はそれを償うことができません。申し訳ないことです。主イエスはその罪の裁きを、全部引き受けて下さり、あなたの赦しを、この私にも、もたらして下さいました。本当に感謝します。十字架と復活の主を信じることによって、私たちにも、天国に迎えられる新しい命を頂ける将来をお与え下さいましたことを感謝します。主の十字架と復活の恵みの福音を信じつつ、残された 地上の生涯の一日一日を、信仰をもって誠実に生きる者にして下さい。救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。 アーメン